

〔書評〕

宮地裕編

## 『慣用句の意味と用法』

西尾寅弥

この本は、「日常ごく普通に使う慣用句を、具体的文例にもとづいて解説したものである。」（「はじめに」より）したがって、慣用句辞典の性質をもっているが、基本的な慣用句を網羅することを旨としたものではなく、むしろ少数の基本的な慣用句を例として、そのくわしい記述の方法を模索し、開発しようとしたものであろうと解せられる。

この本が成立した事情については、「はじめに」と「おわりに」を読むとわかる。著者は、十年来「成句」の問題に関心を向けて、いくつも論文を書いてこられたが、一九七九・一九八〇年度には、大阪大学文学部研究科の演習で、院生・研究生とともに慣用句の研究を行った。それぞれの年度末に、そのまともを少数数刊行し、ついで八一年度には、その訂補・総括を行って、原稿にまとも、さらに訂補を加えたのが、この本の草稿である。すなわち、宮地裕氏を中心とする、若い研究者たちによる共同研究の成果である。

この本の主要な部分である「慣用句例解」は、二三〇ページあまりあって、全体の四分の三の分量を占めている。ここには、一八二の慣用句が五十音順にとりあげられている。

ここで取り上げられている慣用句は、「執筆者の自由な選定によっている」（「はじめに」）が、三年間に、ある量以上の文例を拾うことのできたものに限られていて、ごく普通に使われている慣用句にはちがいないものである。

右の慣用句の一つ一つについて、文例、意味、文法、類義語句、参考（「付説」を加えるばあいもある）という項目を立てて解説をしている。

まず、「文例」をいくつか掲げることから解説をはじめるところに、慣用句をその実際の使用例をとおして解説しようとする方針がうかがわれる。このような方法は、普通の単語の記述の場合以上に、慣用句においては必要であり、有効であろうと思われる。

文例の出典は、ひとつひとつ明確に示されている。近年刊行された文学作品やその他の著作物、新聞、雑誌、教科書が中心だが、すでにある資料を活用しているものもかなりある。辞典類からの引用としては、たとえば『小学館』（日本国語大辞典）、『学研』（学研国語大辞典）、『E. SED』（E・G・サイアンス・テクノロジー）松本道弘『日米国語辞典』朝日出版社（一九七七）などがある。また、国立国語

研究所の、語彙調査のために作られた用例カードも利用されている。

文例の出どころをみると、「あぐらをかく」は十二例がみな朝日新聞から、「しゃくにさわる」は十例がみな文学作品から、というような項目もある。しかし、多くの項目は、あれこれの資料から文例が並べられている。

次の「意味」の項には、その慣用語がそなえている一般的な意味が解説されており、中心的な部分と言ってもよいだろう。たとえば、「あっけに取られる」の「意味」の項には、

言動や出来事を視覚・聴覚などを通して感知し、その意外性・突然性におどろきあきれ、その状態がある短い期間継続する様をいう。価値評価を含んだ言葉ではない。

と記述されている。その内容は、前の項の「文例」を次の項の「文法」において検討した結果や、「文法」の次の「類義語句」の項における「あいた口がふさがらない」「肝をつぶす」「あきれ返る」などとの比較を反映し、それらと相応じている。『日本国語大辞典』の「あっけに取られる」をみると、「思いもかけないことに出会って驚きあきれる」という語釈が与えられており、本質的に大きい差はないにしても、右に引用したこの書の規定はより精密な周到なものになっている。

文句なしに「意味」と言えるかどうかはわからないような、意味の周辺のな部分にまであえて迫ろうとしているような項目もある。たとえば、「かぶとを脱ぐ」の「意味」は、

勝負・競争・論争などで相手に負けて降参すること。いやいやではなく、むしろ相手の力を素直に認めて、軽い敬意をもつてというニュアンスがある。

と説明されているが、この中の第二のセンテンスに述べられている内容をその例にしよう。「意味」の前の「文例」には、

③「米国外交の」根底に流れるのは人権である」とカプトをぬいだ格好。『朝日・朝』一九七九・五・九

⑤やはり、T5かT9点はやられたと思ったと、率直にカプトを脱ぐ。『朝日・朝』一九七九・一二・五

⑥「負けは負け」とあっさりカプトを脱ぐところが、また北の湖のカラリとした性格をあらわしている。『朝日・朝』一九七九・一一・一六

のような六つの文例があげられている。ここにあげられている文例では、「かぶとをぬぐ」が「あっさり」「率直に」に修飾されていたり、前後の文脈からも、いさぎよく相手に敬意をもって降るといふ意味合いが感じられるようである。ただ、「かぶとをぬぐ」を何十例も集めてみても例外なしにそう言えるかどうか、書評子の主観では多少の疑問が予想される。しかし、右のような意味合いを帯びやすいという傾向はおそらくあると思われる。そういうことは、あれこれの国語辞典をみても言及されていないようであり、そのことの指摘は広い意味の意味分析として大切なことだと考えられる。やや疑問を感じる例としては、「あぐらをかく」の「意味」の項に、

あるものの上にドカッとすわって、ずうずうしくかまえる。

現在の地位・立場を利用(悪用)して、他者の迷惑をかえりみず、いい気になっている意。他者に対する批判的なニュアンスをもつ。

という記述がある。「他者」が二度出ているが、あとに出る「他者」

は「あぐらをかく」の動作主をさし、前に出る「他者」は動作主から影響を受ける人や人々をさすとみられる。その区別が示されていないので、やや混乱した印象を与えられる。

一般に、困難は大きいであろうが、単語の意味の分析において開発されはじめているような、できるだけ明示的な形で意味特徴をとります方法が、より積極的に試みられる余地があるのではなからうか。

「文法」の項は、「しゃくにさわる」を例にすると、

文型「ダレダレはダレナニが——。」あるいは、「ダレナニがダレダレの——。」

ダレナニには、人・人の性癖・事物などがくる。命令・使役・可能・意志形は一般的ではない。

と簡潔に要領よくまとめられている。まず、その慣用句を中心にしでどういう文型が成り立つかが示されるが、そこで「ダレダレ」「ナニナニ」のほかに、両者を含めて「ダレナニ」という表現も使われている。

「ダレナニ」の例をなお、一、二あげてみよう。「血道をあげる」は「ダレダレがダレナニに——」という文型をつくり、「ダレナニは、異性・賭け事・道楽・利益など」である。「目がなない(一)」「ある人や事物を、他のものをさしおいてとびつく位、度を越えて非常に好んでいる状態」という意味。ほかに、判断などの力がない意味の「目がなない(二)」という項目も立てられている。も「ダレダレがダレナニに——」という文型をつくる。しかし、「ダレナニに当たる語には、人や趣味、嗜好物や飲食物が入る」のである。このように、「名詞＋格助詞」という成分の名詞として、どういう語彙的な

意味をもったものが立ちうるかということ、慣用句の十分な記述として欠くことのできないものである。また、日本語の慣用句を外国語として学習する立場でも、有効にはたらくものであろう。この方面の記述にも、「文例」の項にかかげられているような例文が活用されていることはいうまでもない。

動詞慣用句については、意志・命令・可能・受身・使役などの形があるかどうか、一般的か、という点に注意が払われている。一般に、慣用句を含む文の観察が重視されている。

次の「類義語句」の項では、その項目の見出し語である慣用句と類義関係にある慣用句や単語があげられている。

たとえば、「とりこになる」のところには、「類義語句」として、

熱中する、夢中になる、没入する、やみつきになる、うつつきをぬかず、魂を奪われる

という語や慣用句があげられている。その説明は、

前三者に比べ、後四者はマイナスのニュアンスを帯びやすいであらう。

とあるだけなのは残念であるが、これらの語句は単語中心の類義語の比較では、比較の対象からみればやすすいものであった。徳川・宮島編『類義語辞典』（東京堂出版）の「熱中」の項目をみると、

没頭 専念 専心

の四語について、いろいろな面からおたがいの間の異同が検討されている。しかし、ここでは検討の対象はおのずと単語の範囲内に限られている。

類義語句の間の異同などについて、積極的にかなりくわしく検討している項目もみられる。たとえば、「しゃくにさわる」という見

出しのところでは、「類義語句」として、「癩だ、気にさわる、頭にくる、腹が立つ」をかかげ、以下のように説明している。

「癩にさわる」は状態としても変化としても使える。それに対して「癩だ」というのは状態性が強い。したがって①のように「ぐっと癩にさわる」といえるが、「ぐっと癩だ」とはいえない。「気にさわる」は「癩にさわる」と同じ意味で使われる場合もあるが、どちらかというところ「癩にさわる」の方が不愉快の程度が大きく、自分の感情を害する原因が、あることから、事態であるとしても、その奥にそれらを生みだしている人間に対する嫌悪感のようなものが潜んでいる。「気に障る」は、不愉快の程度が少なく、たとえば「こんなことをいってもよしあなな」の気にさわったらごめんさい」というように軽く使われる。

右の「しゃくにさわる」をめぐるのは、なお「癩にさわる」「癩癩をおこす」「癩癩玉を破裂させる」「むかっとする」「トサカにくる」なども思い浮かぶが、「類義語句」の項は多数の語句をあげることを別に意図してはいないのである。

さきに「意味」の項で、例として引用した「かぶとを脱ぐ」の項目では、「類義語句」の項では九つの語句をかかげ、それらについて次のように説明している。

「かぶとを脱ぐ」は競争や勝負について言うのに対し、「シャッポを脱ぐ」はそうではない。「彼の英語力にはシャッポを脱ぐ」(E. SEIDJ)

「脱帽する」と「かぶとを脱ぐ」は共に、降参して相手に敬意を表する意味を表すが、前者の方が後者より敬意のウエイト

が大きい。

「お手上げ」は敬意が含まれておらず、自分ではどうしようもない、手に負えないということで、降参する意は含まれていない。

「ひざを屈する」は相手に屈従することを表す。「かぶとを脱ぐ」にはその意はない。

「白旗をあげる」「旗を巻く」は敬意が全く含まれておらず、ただ敗北を認めることを表す。

「軍門に下る」は負けて相手の支配下に服する意がある。「かぶとを脱ぐ」にはそれがない。

右の説明をみると、さきに引用した「かぶとを脱ぐ」の意味は、類義の語句との関係の中で分析されたものであることがわかる。

『角川類語新辞典』(大野晋・浜西正人、昭五六)は、単語だけでなく慣用句もかなり収めている。たとえば、46「鬪争」の中の466a「降伏——戦いに負けて敵に従うこと」には二二の語句があげられている。「屈する」「参る」「降参」のような単語のほかに、手をあげる、頭を下げる、兜を脱ぐ、旗を巻く、城下の盟

という慣用句があげられている。ただ、それらの間の異同の説明は、「注」の形でときたま加えられている項目があるという程度である。

類義語の研究は、現在さかんになっているが、単語の範囲に限られてしまう傾向があり、意味の上では単語と同じ程度の単位性をもつことの多い慣用句は見逃されやすい。その点で、この書の「類義語句」の項は、慣用句を中心にして、それと類義の関係にある単語も多く取り上げているので、類義語の研究における従来の欠けた側

面をおぎなう方向を示す結果になっている。

五番目の「参考」の項は、その慣用句となんらかの意味で対応性のあるような語句・表現を、英語・中国語、フランス語・韓国語・タイ語についてさがしもとめるという、ユニークな内容である。ここでは、右の五つの言語をそれぞれの母国語としている留學生の知見が生かされているようである。書評子には、右の諸言語の大半について知識がないので、原語に付けられた和訳にたよって推測することしかできないが、対応性にはいくつかのタイプがあるとみられる。一つは、慣用句全体の意味が似ていて、しかも発想法にも共通性のあるものというタイプである。たとえば、「波に乗る」に対する、英語の "to ride (on) the waves" のようなものである。また、句全体の意味が似ているだけで、発想法はちがうタイプがある。たとえば、「身も蓋もない」に対する、タイ語の "khwān phāa saak" (斧で木を割る) のようなものである。さらに、発想法は一見似ているのに、句全体の意味は違うものがある。たとえば、日本語の「目尻をさげる」は機嫌のよい表情を示すのに対して、英語の "eyes drawn down" (目尻をさげる) は不景気を示す (あとの「慣用句解説」の二四八頁にある例) ようなものである。このような、対照言語学の問題は今後の課題であり、諸文化の比較にも関係があるだろう。

項目によっては、さらに「付説」がある。慣用句の歴史的な由来、語原などが説かれている。

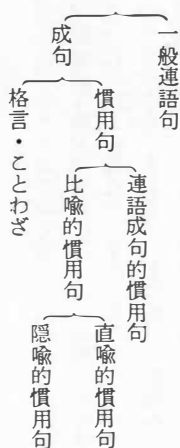
慣用句の項目どうしの関係、連絡については、かならずしも十分ではないと思われるところがある。たとえば、「耳を澄ます」の「類義語句」の項には、「聞き耳を立てる」「耳を傾ける」などの例文を

いくつも引用して説明されているが、「聞き耳を立てる」という項目は別に立てられているのだから、そちらを参照させる形で簡単にまとめたほうが、すっきりしたのではなからうか。ただ、各項目を独立的に読み切り式に利用できるほうが便利な点もあるから、一概には言えないことだろう。

以上にみてきた「慣用句例解」の部分につづいて、この書には約三〇ページの「慣用句解説」が付けられている。

「総説」のはじめに、慣用句の分類について、次のような案が示されている。

慣用句は、一般の連語句(語の連結体で句としてのまとまりを持つもの)よりも結合度が高いものだが、格言・ことわざと違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではない。一般の連語句より結合度が高いだけのものを「連語成句的慣用句」と呼び、そのうえに比較的はつきりした比較の意味を持つものを「比較的慣用句」と呼ぶとすれば、次のように分類できる。



(著者からの私信により、右の図式については誤植の訂正がしてある)

右の分類案について、一つの疑問点がある。「連語成句的慣用句」

は、「一般連語句」と「比喩的慣用句」の中間的な位置にあるものと解せられ、「慣用句例解」の中からさがせば、

きりがない 幸か不幸か 公算が大きい 心当りがある  
難色を示す 念を押す 一役買う 役割を果たす

のような句は、その例であろう。「比喩的慣用句」は、

足が地に着かない 奥歯にもののはさまる 血がにじむ

(よう) 波に乗る 氷山の一角 身のおきどころがない

などの例がみつけられる。ところで、

お茶を濁す 袖にする 鼻をあかす 棒に振る

などは、日常的な語でくみだてられているように見え、慣用句全体としての意味はあきらかだが、右の二つの類のいずれにも属さないのではないか。ある慣用句に比喩性を感じるかどうかは、その句の由来についての知識に大きく左右されるので、個人差なども大きいだろう。現代の一般の言語意識では、

折り紙をつける 口火を切る けりがつく／けりをつける

さじを投げる しのぎを削る メリハリがきく もとも

子もない

なども比喩的慣用句ではなくなっているのではなからうか。比喩の力はすでに弱まり、あるいは死んでしまったが、慣用句としては生きのびているものもあるのだ。宮地氏の分類案は、慣用句全体の範囲ではなく、現代語の意識においてもその内部構造が透明である範囲の慣用句についてのものと考えられる。

「総説」について、「品詞別の特徴」「語彙的な特徴」「形式上の特徴」「形式上の制約から見た特徴」と四つの章がある。書評子には、おわりの章の最後の二節「連体修飾の受けかたについて」「副

詞の受けかたについて」の中の観察がいちばんおもしろく感じられた。

「慣用句例解」のあとに、「常用慣用句一覽」と「索引」がある。

慣用句は、国語辞典の中での扱われかたに不備なところが多く、また、組織的な研究の対象になりにくい性格をもつが、近年になって目立った研究上の進展をみせている。宮地氏の研究は、その大きい柱の一つである。この書は、その成立の事情から、研究書としても、慣用句辞典としても、不徹底な性格を含んでいる。今後、そういう制約のない形での成果を示してくださることを願っている。十分な読み込みをするゆとりがなく、理解も浅い状態で書き綴ったことをおわびいたします(この書の書評として、阪田雪子氏によるものが、昭和五十八年六月に出た「日本語教育」の五〇号にある)。

(昭和五十七年十月二十五日発行 明治書院刊 A5判 三二八頁 三八〇〇円)

——大妻女子大学教授——  
(昭和六十年四月二日 受理)